
朗読会

大森ろら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

朗読会

【Zコード】

Z58910

【作者名】

大森りり

【あらすじ】

朗読会からはじまる不思議な物語。ガーデンパーティー、藤棚、図書館、本屋、古本屋・・・・本をめぐる僕の不思議な体験。

あの世とこの世を行き来するなかで体験する甘美な本をめぐる物語。

【注意】この作品は私の個人サイトでも公開しています。

<http://rorora.ikidane.com/>

幸介は「ホールのポケットから四つに折りたたんだちらしを取り出してもう一度確認した。

やつぱりここでまちがいない

すでに日は落ちていて、ホールへとづづく道は外灯で照らされていく。

なんでもかに歩いているひとがないんだろう？

しかし一歩ホールに足を踏み入れてみると真っ白な大理石の床の豪華なロビーにはかなりの人数の人間がひしめいていた。

「ホールを脱ぎながら、さてどこへ行けばいいのかとまわりをみまわしていると、どこからか青いスースイ姿の若い女性がかつかつと靴音を響かせながら近づいてきて彼が手にしているちらしをのぞきこみ、「Aの5になります。あちらにあるポイントセチアの左側の通路をまっすぐ行つたつきあたりです」と言つてまたかつかつと靴音をたてながら、いま入り口からはいって来た白髪の老人のほうへと歩いていった。

多少面食らつたものの彼は言われたとおりに大きなポイントセチアの鉢植えがあるほうへ歩いていった。たしかに（小ホール）と書かれた案内の矢印は右側の通路を示しており、（集会室）と書かれた矢印は左側をむいている。左側の通路を歩いていくとつきあたりの部屋の扉に（Aの5）とあつた。その扉はすこしあいていて、中からひとの話し声がきこえてくる。そつとのぞいてみると、十五人ぐらいが半円形に並べられた椅子に腰をおろしていた。ざつとみまわして、まず本多の姿がないことに気がついた。

本多守は彼が朗読会に通うきっかけをつくった男だ。高校の同級生で、幸介のパソコンの教師もある。読書という共通の趣味をもつていて、ときおりこの本良かったよとか、あの本はもう読んだ?などとメールのやりとりをしている。この会はもともと本多の知

り合いの知り合いとでもいうべきひとが主宰しているもので、本多に誘われて半年前から月に一度の割合で参加するようになった。

日本橋にある喫茶店で第一、第三金曜日の夜にひらかれるこの朗読会では毎回、一度に読みきれる短篇をひとつかふたつ、とりあげる。前回はカポーティの「ミリアム」と「クリスマスの思い出」をやつた。朗読をしたのは山下といふ、舞台俳優をしている三十代前半の男だった。あのとき本多は彼のとなりで椅子の背にもたれながらかるく握った両手をおなかのあたりにおいて目を閉じ、朗読に聞き入っていた。

幸介はあいていたうしろのほうの椅子に腰をおろして腕時計で時刻をみた。そろそろはじまる時間だ。と、すこしあいていた扉が閉まってあかりが落ちた。前にひとつだけぽつんとおかれた椅子にはまだ朗読者の姿はない。たぶん山下さんは現れないのだろうなと彼はおもつた。まわりをそつとみまわしても見知った顔がひとつもない。今回は場所も違うし、これは別の主催者による朗読会なんだろう。だから本多もいないので。

彼はちらしをたしかめようと鞄をさぐつたが、その音がやけに大きく響いたのでおどろいた。いつのまにか周囲の話し声はやんざりても静かになつている。彼は目をこらした。

『城』 フランツ・カフカ作 朗読／相沢イツコ

『城』は十代の終わりに読んでやけに感激した覚えのある作品だ。しかしそれ以来一度も読み返していない。

いつそう暗闇が深くなつた氣がして顔をあげると朗読者がちいさなスポットライトのなかにいて今日はほんとに冷えますけれどみなさんお風邪などひいておられませんかと語りかけていた。朗読者の椅子はほかのみんなの椅子よりも高くつくられているようで、そこに座つた朗読者の顔がよくみてとれる。まだ二十代なかばぐらいの髪の長い女性だ。すこし頭を傾けると人々の隙間から黒いタートル

ネックの二ツにジーンズをはいている姿がみえた。耳にオパールのような小さなピアスをつけていた。

「つめたいものが空からふりだしそうなので、せっしゃくはじめることにいたします」

幸介はいつの間にか目をとじていた。本多のようにおなかに手をおいて体を背もたれに預ける。部屋は寒くもなく暑くもなくちょうどいいぐらいだった。もしもうすこし暖かければすぐやまとりとした眠りに引きずりこまれていただろう。

朗読者はまるで夜眠る前にベッドのなかでそっとページをめくつているかのような親密な感じの朗読をした。どちらかといつと抑揚のすくない小さな声はしかし、耳元で囁いているかのようにはつきりと聞き取ることができた。

彼は、昔、自分の部屋で『城』を読んでいたときのことをおもひだした。微小な白い虫がはいまわつていてるような古い世界全集があり、彼はその夏それらをすべて読もうと心にきめていた。『城』はそのなかの一冊だった。はじめのほうは一頁読み終えるのにもたいへんな苦労を感じた。彼はしおりひもを人差し指の先にまきつながらのろのろと読みすすめていき、ときおり残りの頁の厚さを指ではさんで確かめたりした。とにかくひどい暑さで、部屋にもつてきた飲み物のグラスが彼以上にだらだらと汗をかいていた。氷は十数秒できれいにとけてなくなり、グラスの表面はくもり硝子のようになつた。

朗読が終わると部屋はあるくなり、人々は窓際にあつまつて暗い窓の外を白いものがゆつくりとはしつていいくのをながめた。彼も人々のうしろから背伸びをして雪をみつめた。

このひとたちが飽きるまでここにこうしていよつ、と彼はおもつた。帰りもある道をひとりで歩きたくなかったから。

長いこと生のうえに寝転がつて待っていた。

やつとちぢらほらひとが集まつてきたぐらいで、まだはじまるのに
はだいぶ時間がかかりそうだ。はおつてきた上着は暑くて脱いでし
まつていまは枕がわりに頭の下でしゃくちやになつてゐる。

しばらくして園内というムーンホールの厨房で働いている男がや
つてきて彼の隣に腰をおろした。

かけていた眼鏡をとつて白いシャツの裾でレンズをふきはじめる。
彼はカラスの話をはじめた。彼が暮らしているあたりを縄張りとし
ている六羽のカラスが口にくわえた石やガラス瓶の破片を空から通
行人めがけて落とすのだという。

園内はきれいになつた眼鏡をかけてハンチング帽をとると、その
てつぺんをじろじろと眺めた。糞がついていないか確かめているの
だ。それから幸介に背中をむけて大丈夫かどうかたずねた。幸介は
よくみてから、大丈夫だ、とうなずいた。

まあ、しかたがないといえばしかたないんだよ、なんせかれらが
棲み処にしていた森がなくなつちゃつたんだから、そう、よくある
話さ、ひとがひとり死んで、残された人々がすべてをすっかり変え
てしまふ、いまはその森、ひいろい駐車場になつちゃつたよ、巨大
で立派な駐車場、その森は冬になるとすっかり葉がおちて、カラス
たちがつくつた巣が下から見えてさ、なかなかよかつたんだけどね、
それはもうおつきな立派な巣でさ、うん、残念な話だよ。

幸介はカラスのおおきな巣がある冬の木を想像して、それからむ
かし自分が木登りをしていたころのことをおもいだした。なにしろ
彼のむかしのあだ名は（木登り上手）だった。でも彼よりもっと高
い場所までするすると登れる少年がひとりだけいた。彼は（幽霊）
と呼ばれていた。みんなの想像を超えた木登りの達人だったからだ。
彼は裸足でも靴をはいたままでどちらでも同じようにするする登
つた。級友のひとりがのぼり棒から落ちて大怪我をし、それ以来木
登りも禁止されてしまつても彼らふたりだけは隠れて神社の大銀杏
の木に登りつづけた。

幸介は幽霊がするすると上のほうへ消えていくのをじつと下から

見ていた。彼が失敗するおそれは万に一つもなかつた。不安にかられたことは一度もなかつた。ただ、地上にもどつてきた幽靈に上着をかけてやるときだけはいつもその肩の冷たさにどきつとした。それはまるで上空の冷氣をそつくり持ち帰つたかのような特殊な冷たさだつた。

おい、と蘭内が顔をつきだして、幸介の背後を指差した。

「そろそろはじめたほうがよさそうだ」

そこにはみたことのないほど長いテーブルが置かれ、椅子が続々と運ばれてきていた。コック帽をかぶつた体格のいい男がこちらにむかつておおきく手招きをしていて。慌ててふたりで駆けつけると別の半そでシャツの男が、「椅子はもういいから皿を並べてくれ。急いでな」と言つて皿やフォークやナイフやスプーンやグラスなどがどつさりはいつたカートを指差した。

すでに大勢の客が椅子に腰をおろしはじめている。あたりは突然にぎやかになつて蘭内が言つてゐる言葉もききとれない。

「お手伝いしましょう」

横からグラスを手にとつたのは朗読者の彼女だった。咄嗟に名前がでてこない。緑色のフードつきのパークーにデニムのミニスカートをはいて、髪をピンク色のゴムでひとつにしばつている。

「ほんとに急いでやらないと」

そう言つて彼女は彼の手がとまつていてることを指摘する。彼は慌てて皿を置いた。

「なあ、君」とスカーフを首にまいた年配の男性が横から声をかけてくる。「もうみんな席についているようだし、皿やら箸なんかは手渡ししていつたほうが早いんじゃないかな」

ああ、そうですね、と彼は男に皿を何枚かまとめて手渡した。テーブルには花をいけた花瓶がおかれ、料理がぞくぞくと並べられている。どうやら厨房で用意したのはあたたかな料理だけで、惣菜やサラダやデザート類、飲み物なんかは参加者がそれぞれ持ち寄つてきているようだ。蘭内もいつのまにかおいしそうなマリネのような

ものがはいつた深皿をだしているし、朗読者の彼女、こまやつと名前をおもいだせたのだが、相沢イツコもガトーショコラらしきものを箱からとりだしてテーブルにおいている。

気づくと彼以外はみんな席についていて、イツコのとなりの席だけがぽつんとあいている。彼がその席に座つてどきどきしながらわくわくの上着を椅子の背にかけようとする、ポケットから不恰好に飛び出している瓶が椅子に「じつんとあたつた。取り出してみるとそれはウォッカで、それをみたイツコが「わたしがウォッカに目がないことじつてたの?」と満面の笑みをうかべて瓶を手にとり、テーブルの、彼女と彼の間にいた。

幸介はようやくほつとして参加者をみまわし、やはり本多の姿がないことに気づいた。

どうかしたの、といツコがたずねる。

「友達の姿がみえないんだ」

「なんていうひと?」

「本多守」

しかし彼には本多に声をかけたかどうかが判然としなかつた。もしかするとすっかり忘れていたかも知れない。

「ホンダマモルさん・・・・・・」イツコはあごに手をやつた。「わたしの友達にもね、すこしまえから姿を見せなくなつてしまつひどがいるの。スドウミクさんとじつてわたしの前に朗読をひきうけていたひとなんだけど

「そなんなんだ」

「ええ。彼女の朗読はとてもすばらしかったのよ。あなたも聞けたらよかつたのに」

「でもぼくはきみの朗読で充分満足してるよ」

「ほんとう? 実はまったく自信がないの」

「いい朗読だよ。ぼくはすぎだな」

イツコはにつこりわらうと彼の肩をつつき、背後の林を指差した。

それからテーブル上の食べ物をそつとナップキンにつつんでポケット

におしこみはじめる。彼もそれにならつた。そしてウォッカの瓶とグラスをふたつもつてふたりは席をたち、ぶらぶらと林のほうへと歩いていった。

藤棚の下からひとびとが散つてしまつたあとで、幸介はベンチから腰をあげてちいさな太鼓橋の上から池をみおろした。おおきなうつくしい鯉たちがわらわらと近寄つてくる。そのなかでも白い肌に金の砂をまぶしたかのような鯉がほかのものがいなくなつたあとでもしばらく橋の下にどどまつて口をぱつかりあいている。彼は上着のポケットに手をいれて、底にあつたなにかをとりだしてみた。ビスケットのかけらだ。ぽんと池に落とすとかけらはしづかに落ちていき、きれいな鯉もいつしょに沈んでいった。

本多とは連絡をまだとつていない。園内もここ数回、朗読会に現れていない。

幸介は朱塗りの欄干をこんこんと手の甲で叩いて鯉を呼びもどそうとしたけれど鯉は沈んだままかそれとも別の場所へ移動してしまつたのか姿を現さない。ポケットをさぐつてみると、ビスケットのかわりに紙切れが出てきた。そこには本の題名が連ねてある。いつか読もうとおもつていた本のリストだなど彼はおもつた。

そういうえば本屋と古本屋と図書館がひとつになつた便利な建物が近くに出来たんだつたと彼はおもいだした。おぼろげな記憶をたよりに神社を出て歩き出すると、五分ほどで真新しい巨大なレンガの建物をみつけた。

案内の看板があつて、図書館は外階段を一階分あがつたところからも入れるとある。広々とした外階段をあがると立派なオレンジ色の花が咲いたアロエの花壇がまず目にはいつた。入り口の自動ドアを通りぬけると、わつと視界がひらける。フロア全体が一望できる。ふつうの図書館や書店にあるような高い書棚はひとつもなく、大人の背丈ほどの高さの棚に本が並べられている。床には分厚い絨毯が

ひかれ、人々の足音を漏れなくすいとつていてる。

彼はまっすぐ貸し出しカウンターに行くと、そこにいた若い女性に田町の本がある場所をたずねた。女性はパソコンでかちやかちやと検索をしたあと、図書館内の地図を一枚とりだして探している本がある場所にオレンジ色のペンで丁寧に印をつけてくれた。ありがとう、と幸介は礼をいうとそこから一番近い印の場所へむかつた。かすかにコーヒーの香りがする。見上げると上のフロアで紙コップを手にしたひとが数人透明のガラスのむこうからこちらをみおろしている。コーヒーもいいけれど、とりあえず本を探してしまおうと、おしえてもらつた棚から次々に田町の本をみつけて胸に抱えこんでいった。全部揃つと、カウンターに戻つてカードを作り、さつき本の在り処を教えてくれた女性にもう一度礼をいつて、さつきとは別の出入り口から外に出た。

そこもまだ建物のなかだつた。田の前に書店の入り口がある。そのままはいつていいくとリストをもう一度ひらいで、今度はぶらぶらと店内を歩きはじめた。はじめての図書館にくらべれば、はじめてはいる書店のほうがなんとなく本をさがしやすい気がする。

リストに水色の字で書かれている小説の新書を二冊みつけたあと、海外小説の棚へいった。はしからはしまでみてみたけれど、欲しい本がどうしてもみつからない。ちょうど段ボール箱を抱えて通りかかった店員を氣の毒だとおもいながら引き止めてたずねると、ああ、それはたしか絶版になつてるとおもいますよといつ。「今調べてみます」というので手近にあつた本を開いて待つていると、早足で戻ってきた店員が「やつぱり絶版でした。品切れというわけではないんですよ」とおしえてくれた。ああそうでしたか、と残念な声をもらすと、「古本屋なら扱つてることをみかけたことがありますから、ためしてみたらどうですか」と励ますようにいわれた。

その店員に丁寧に礼を言つて会計場所に歩いていくと、やけに混んでいて列ができている。

最後尾の男性のあとにつくと彼は本を開いた。最初の数行で胸がどきどきしてきた。これは家に帰つてからゆっくり読むべき小説だ、とおもい、本を閉じた。顔をあげるとちょうど前に並んでいた男性の横顔が目にはいった。

「どうさん」幸介はおどろいた声をあげた。

男はふりかえつて彼を見た。

「お」

ふたりはお互に手にもつている本をちらつと見た。幸介の父親は外国語の辞書のようなものをもつていて。

「そういうえば辞書がぼろぼろになつてたね」

「ああ。なるべく似たようなものをさがしてみたんだけど、これならいいだらう」

「よせそうだよ」

「ここにはよく來るのか?」

「いや、はじめて」

父親は彼の手から本をとると、自分のものと一緒にレジにだして会計をすました。

「じゃあ、またここで会つことがあるかもな」

「そうだね。これ、ありがとう」

父親は自分の辞書の包みを手にすると軽く手をあげて去つていった。

彼は書店を出ると古本屋をさがした。古本屋は建物の地下にあった。地下のフロア、すべてが古本屋だ。ここならなんでもあるに違いないと幸介は期待した。

早速、絶版だと言われた本があるかどうかを近くにいた年配の店員にたずねてみた。店員はすぐさまそれならちょうど今一冊ありますよとこたえた。絶版だとやはり高いんですね、とすこし不安になつた幸介がたずねると、店員はいやいやと首を横にふつた。
「定価よりすこし高いぐらいですよ。うちほんは良心的にやつてるんです。法外な値段は滅多なことではつけやしません。大丈夫ですよ」

親切にも彼は本がある場所まで幸介を案内して、棚から丁寧にとりだして手渡してくれた。

「IJの本はいい本ですよ。なんで絶版になつたのか訳がわからない」と店員は言つた。「もし手放すときはまたうちに来てくださいね。ほかの本も歓迎します」

わかりました、ありがとうといつて彼はレジカウンターのあるほうへ歩いていった。店内は薄暗くて広くて見渡す限りぎつしりと本が詰まつていて、いかにも掘り出し物がたくさん眠つていそうだ。でもじつくり見てまわるのはまたしようとしたが幸介はおもつた。たのしみがまたひとつふえた。

と、通り過ぎようとした棚の文庫に田中がとまつた。イツゴがまえにすきだと言つていた富沢賢治の本だ。どんぐりが出てくる短篇がはいつているもの。ひらひらしてみるとかわいい挿絵がついていて、きっと彼女はこれが気に入るだろうとおもつた。それでそれもいっしょにレジカウンターにもつていつた。

IJの文庫、別に包んでもらえますかね、と若い店員にたずねてみると、贈り物ですかと訊き返された。ええ、とこたえると、うちはラッピング無料ですからと薄茶の薄紙に手早く包んで黄色いリボンを結んでくれた。

よかつたとおもいながら受け取ろうと手を伸ばしたとき、はしつと店員がその手をつかんだ。おどろいて顔をあげると、ざわめきが周囲で起こり、いくつかの手が同時に彼の体に触れたのが感じられた。どこかに横になつているのか、上からのぞきこんでいるいくつもの顔が彼の名前を呼んだり、話しかけたりしている。声を出そうとしてみるのだけれどうまくいかない。ぼんやりした顔のひとつは本多に似てみえた。泣いているのだろうか。顔がくしゃくしゃにゆがんでいる。やがてだれかが彼の体をつよく揺さぶりはじめた。彼はそれを感じた。とてもつよい。つよいままそれが、ゆっくりと彼のなかから遠ざかっていくのを彼は感じた。

何度か目を瞬くと、そこにはイツゴがいた。彼のことをじつとみ

つめている。彼女の両手は本を支え、暗がりのなかから周囲の人々のしづかな息づかいがそつと伝わってくる。

彼がちいさくうなずくと、彼女は頁をめぐり、そつと息を吸い込んだ。

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5891o/>

朗読会

2011年5月11日19時40分発行